



四国のツキノワグマについて知っていますか？ - 絶滅が危惧される、その現状 -

主催：四国自然史科学研究センター WWFジャパン

共催：土佐生物学会 高知大学

後援：NHK高知放送局・高知新聞社・RKC高知放送・KSSさんさんテレビ・KUTVテレビ高知・よさこいケーブルネット・FM高知・朝日新聞高知総局

開催趣旨

NPO法人四国自然史科学研究センターは2002年から四国のツキノワグマの生態調査を始めました。WWFジャパンは2005年からその支援を開始し、徳島県と高知県にまたがる剣山地及びその周辺に生息していること、越冬の実態やおおよその行動圏などの把握に努めてきました。こうした情報をもとに保護区の拡大を国に提言し、2009年11月には国指定剣山山系鳥獣保護区が東南方向に1678ha拡大されました。

2012年7月からは両団体による「総合調査」として、四国では初めてとなるGPSによるクマの追跡調査と、食料となる堅果類の資源量調査を実施しています。今春には、子グマの誕生が確認され、静止画と動画の撮影に成功しています。

今回のセミナーは、広く一般の方々にもご興味を持っていただける形で、四国のツキノワグマについての平易な講演をおこない、質疑応答の時間も設けさせていただきます。四国のツキノワグマが絶滅の危機から回復する道筋を、来場いただいたみなさんとともに考える機会としたいと考えています。

プログラム

13時30分 開会あいさつ 谷地森秀二(四国自然史科学研究センター)

13時40分 講演1

「四国のツキノワグマ、その歴史と現状」

金澤文吾(四国自然史科学研究センター)

14時10分 講演2

「四国地方ツキノワグマ地域個体群絶滅回避のための総合調査
-1年目の成果とこれからの課題-」

山田孝樹(四国自然史科学研究センター)

15時10~20分 休憩

15時20分 質疑応答

15時55分 閉会挨拶 大倉寿之(WWF ジャパン)

講演 1

四国のツキノワグマ、その歴史と現状

金澤文吾（四国自然史科学研究センター）

ツキノワグマは、森林を中心に生活する大型ほ乳類で、その生活様式からしばしば豊かな森を象徴する野生動物として例えられる。北は下北半島から南は四国まで彼らの姿をみることができ、北日本では生息数が安定していると考えられている。しかし、地域によっては生息地の縮小、分断化が懸念されており、環境省のレッドリストでは、下北半島と西日本の5つの地域個体群を「絶滅のおそれのある地域個体群」としている。九州では1957年に捕獲された個体が最後の情報となり、2012年8月、環境省はすでに絶滅していると発表した。次いで絶滅の危険性が高い状況にあるのが四国である。四国のツキノワグマは、現在、徳島県と高知県にまたがる剣山地及びその周辺にわずか10数頭から数10頭のみが生息していると推測されている。かつては、愛媛県や高知県西部を含め、四国の広い範囲に生息していたが、大規模な植林や過度の狩猟などの人間活動によって、その生息地は縮小し、個体数が減少したと考えられる。

幸い、四国では本州でしばしば起きているようなツキノワグマによる人身被害の記録はない。極めて限られた生息環境の中で細々と個体群を維持している。四国の豊かな森を後世に残すためには、ツキノワグマが将来にわたって存続できる森づくりや人とツキノワグマの共存する道を築いていくことが求められる。ここでは、四国におけるツキノワグマの歴史、近年の生態調査や保護の取り組みなどを紹介する。

講演 2

四国地方ツキノワグマ地域個体群絶滅回避のための総合調査 —1年目の成果とこれからの課題—

山田孝樹（四国自然史科学研究センター）

四国のツキノワグマは、高知と徳島にまたがる剣山地及びその周辺に、数十頭程度が生息していると推測され、環境省によって「絶滅のおそれのある地域個体群」に指定されている。国内で最も絶滅が危惧される地域個体群にも係らず、生態等の情報が不足しているため、有効な対策が取られているとは言い難い状況にある。

そこで四国自然史科学研究センターは、2012年7月からWWF ジャパンと共同で「四国地方ツキノワグマ地域個体群絶滅回避のための総合調査」を実施している。今回の総合調査では、詳細なデータの収集と蓄積を行い、その情報を元に行政当局に対して提案・提言を行う等、四国地方地域個体群の絶滅を回避するための、具体的な保護管理活動を推進することを目指している。

本発表では、1年目に得られた成果を報告する。調査は、1. 生息地における堅果類（ブナやミズナラ）の資源量調査、2. GPSによるクマの追跡調査を行った。資源量調査では、資源量を調べるためのシードトラップを7地域（ブナ5地域、ミズナラ5地域）にのべ296基設置した。その結果、ブナは5地域すべてで凶作、ミズナラは豊作が2地域、並作が1地域、凶作が2地域となり、地域間での違いが見られた。追跡調査は、3頭のツキノワグマを捕獲しGPS首輪を装着した。3頭とも、標高1,000m以上の地域を活動することが多く、ブナやミズナラが生育しているブナクラス域植生を選択的に利用している傾向が見られた。剣山山系においてブナクラス域植生は、標高1,000m以上に多くみられるため、それらの環境を選択した結果、高標高域での活動が多かったと考えられる。今後も調査を継続し、クマにとっての重要な環境や地域を明らかにし、具体的な保護管理活動の提案に繋げていきたい。

講演者略歴

金澤文吾 (かなざわ ぶんご)

1969年神奈川県生まれ。東京農工大学大学院にて野生動物保護学を学び、2000年より高知県に移住。10年以上にわたり剣山に通い、剣山周辺に生息するツキノワグマの生態調査に従事してきた。2005年からはWWFジャパンと共同して、ツキノワグマを捕獲、追跡調査を開始し、その行動範囲や越冬生態を明らかにしてきた。

山田孝樹 (やまだ たかき)

1986年茨城県生まれ。東京環境工科専門学校野生動物調査科卒業。その後、石川県白山自然保護センター臨時職員としてツキノワグマやニホンザルの保護管理業務、財団法人自然環境研究センター嘱託職員として岩手県でのツキノワグマの調査研究等に従事。平成23年4月より、NPO法人四国自然史科学研究センターに勤務。現在に至る。



写真. 総合調査で捕獲した3頭のツキノワグマそれぞれの月の輪の形

「四国のツキノワグマについて知っていますか？

- 絶滅が危惧される、その現状 -」

講演要旨集

平成25年6月29日 印刷・発行

編集・発行 特定非営利活動法人 四国自然史科学研究センター
〒785-0023 高知県須崎市下分乙470-1新荘公民館内
TEL : 0889-40-0840 (F A X兼)
URL : <http://www.lutra.jp>
E-Mail : sion@lutra.jp